
たゆたう魂のうた

あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たゆたう魂のうた

【Nコード】

N2345X

【作者名】

あきら

【あらすじ】

ベルゼブブ復活の兆候が世界を混沌へと誘う。復活を阻止すべく戦うナスターシャの結末はどうなるのか。

ソーニヤ：「魔法使いと可愛い妖精の活躍をしっかりと見届けなさい！」

0章のボスはゴブリンよ。こんな雑魚に苦戦するなんて先が思いやられるわ。あ、大事なことを忘れていたわ。『この小説はフィクションであり登場する人物や集団は実在の個人および団体とは一切関

係ありません。

また、登場する神、天使、悪魔もこの小説での独自設定ですので、気分を害したり、呪ったり祟ったりは勘弁くださいませ。』
では、本編で会いましょう。」

0章 - 1

森が鳴いている。

森に住む鳥や動物たちも私と同じものを感じ取っているのかもしれない。数日前から予感があった。それが今朝になると確信に変わった。何か良くないモノが近付いている。そう思い、ストの村を出た。しばらく歩きガサの街への道に出たところでヤツらに出くわしてしまった。

村の方へは逃げず、森へ入った。木々の間を走りながら隠れる場所を探す。追って来ているのはゴブリンが3匹。

「その木の裏に隠れるわ。ナスターシャ」

私が走っている少し先を、小さな妖精が飛んでいる。小さな身体全体でソーニヤが差し示している木の裏へ回り込んだ。木を背にしてしゃがみ込む。呼吸を整えようとするが恐怖で、息が吸えない。いつもは悪戯な笑みを浮かべてばかりいるソーニヤも真剣な顔をしている。

「ここで、迎え討つわ。相手は最弱のモンスターだから初めての実践には丁度いいわ。とはいえ、力は大人の男くらいだから、捕まったら、勝てない。隠れながら魔法でいくわ。いい。」

私は頷き、手にした杖を握りしめる。家にあった唯一の武器。以前、兄が使っていたものだ。

ソーニヤは、頭上で羽ばたいて説明を続ける。手は腰に当て、上半身を乗り出している。

「いい。その杖は魔法を放つのを手伝ってくれる。意志を形にする杖よ。杖の先に、魔法の球をイメージして、魔法の球ができれば相手に飛ぶように念じればいいわ。」

手に持った杖の先端にある宝石を見つめた。恐怖はあったが、呼吸は落ち着いていた。

「わかった。やってみる。」

「来たわ。一番手前にいるヤツから行くわよ。」

ゴブリン達はバラバラに広がり、こちらを探しているようだ。私は杖を胸の前に構えて、先端に魔法の球ができるようにイメージする。

光の粒子がしだい集まり、大きくなり、輝き始めた。それは生い茂る木々で薄暗い森にあつて、明るい希望のようだった。少しの間、私は温かい光を放つ光球に見とれてしまった。

「杖の先を下げて。見つかるわ。」

ソーニヤが木の陰から相手を見ている。魔法の球を作ることだけに集中していた私は、慌てて杖を低く構えなす。杖の先にできていた光球は消えてしまった。

「まあ、初めてだから仕方ないわね。まずは、杖の先に魔力を集めることに集中していいわ。次に私が合図したら相手に向かって飛ばす。いいわね？」

「うん。わかったわ。」

真剣なソーニヤの表情から、緊張感が伝わってくる。私は下げた杖の先に意識を集中する。さっきより早く魔法の球はできた。ソーニヤと目が合い、頷いた。ソーニヤは待っての合図をしたまま、少し上へ飛んでいる。木々が揺れる音とゴブリンの足音だけが聞こえる。ソーニヤが体全体で合図を出した。

「おねがい。当たって！」

私は、隠れていた木から一步出て杖を振ると、思わずそう叫んだ。杖の先から光球がゴブリンへ向かって飛ぶ。私たちとは逆の方向を見ていたゴブリンの頭に当たった。ゴブリンはゆっくりとその場で倒れていった。

「隠れて！」

ソーニヤはそう言いながら、私の方へ飛んでくる。物音に気付いた他の2匹がこちらに近づいてくるのがわかった。

「もう一度行くわよ。準備して」

杖の先に意識を集中する。光球ができたと同時にソーニヤは合図

を出していた。木の陰から出るとこちらに向かっている1匹に向かって光球を放つ。しかし、光球はゴブリンには当たらず、近くの木に当たって弾けた。

「逃げるわよ。急いで」

ソーニヤが指差した方に走った。ソーニヤは後ろから付いてくる。

「慌ててコントロールが疎かになったわね。幸い、弾けた光球が目隠しになったようだけれど。」

逃げながらソーニヤの話を聞いていると、石が飛んできた。ゴブリンの石飛礫だ。

「やばいわね。最初の1匹も追ってきているわ。相当、頭に来ちゃってるみたい。あんな石に当たったら怪我じゃすまないかもね。」
ソーニヤの落ち着いた声の後方で、ゴブリン達の荒い息遣いが聞こえてくる。捕まっただらと思うと全身が震えた。必死で走る。前方が明るい。そのまま、森を抜けた。そして、立ち止る。崖だった。

「飛ぶわよ。杖をしっかりと持って。」

考えている暇はなかった。杖を両手で持つと、その間をソーニヤが、握った。手が上に上がり、足が地面から離れる。

「うゝん。重たい。」

横に飛びながら、ゆっくりと降りていく。

「ソーニヤ、頑張つて。あ、下に湖があるわ」

私は、ゴブリンから逃げることでできたと思って、笑顔で上を向いた。上で杖を持ちあげて懸命に羽ばたくソーニヤが私と湖を見て、笑った。

「じゃゝ、落ちても大丈夫ね。」

言い終わらないうちに、ソーニヤが手を離す。

「えっ！」

やられた。そう思ったが、小さなソーニヤの姿がだんだんと小さく見えるようになる。その顔は、いつもの悪戯な笑顔だった。

0 章 - 1 (後書き)

ソーニャ：「あきら。初投稿だからって、下手くそな文章ね。下手なのは目をつぶってあげるから早く0章を終わらせなさい」

0 章 - 2

ガサの街からスクールへのゴ布林討伐の要請があった。私はゴ布林なんて何匹いようと大したクエストにはならないと思っていた。Cランク、Dランクの連中で十分なはずだ。5日前にスクールからは、Bランク1名とその他30名が出立していた。たかがゴ布林討伐と思ったが、ゴ布林は200を超えるらしい。それでも、ガサの自衛軍と協力すれば、街への被害はないだろうと思っていた。次にスクールへの連絡があったのが3日前、ゴ布林どもは街から離れた位置で待機したままだが、その数は500に膨れ上がっていた。知らせがあったその日にスクールは援軍を出した。私はゴ布林から街を守るなんて面倒なクエストには参加しなかった。ランクに上がるために、もっと難関なクエストでポイントを稼ぎたかったからだ。しかし、偵察隊が送ってきた情報には興味があった。500を超すゴ布林軍。その中心には、蠅王の紋章が掲げられているらしい。50年前の大戦。モンスター軍のシンボルは蠅王の紋章だった。私は直感を信じてゴ布林軍の様子が見える場所まで移動しているところだった。

「きゃー。」

天使が降ってきた。そう思った。天使は湖の上でゆっくりと止まり、落ちた。

「にやはは、ギリギリで止めようと思ったけど、間に合わなかった。」

堕ちた天使は、小さい妖精に岸まで引っ張られていた。

「ちよつとー、その人。手伝ってー」

ちっこい妖精は私がいることに驚いた様子もなく話しかけてきた。私は馬から降り助けに向かう。

「大丈夫？手につかまって」

私は天使の腕をとり、水の中から引っ張り出す。天使はふらふらと

少しだけ歩くと倒れかけた。抱きとめる。ボロボロだった。服はところどころ破けていた。そして、手足や顔は傷だらけだった。特に、左足首の出血がひどい。

「村に、ゴブリンたちが」

消え入りそうな声だった。ちっこい妖精が飛んできた。

「大丈夫よ、ナスターシャ。村の方はドワーニヤがなんとかしてくれるから。」

小さな子供に言い聞かせるような話し方だった。それを聞いて安心したのか、ナスターシャの身体から力が抜けたようだ。

「気絶しただけのようね。傷の手当てをしないと。服も乾かしたがいいわね。そちらの妖精さん。木の枝とか集めてもらえるかしら。」

幸い湖の水はきれいだった。傷口を水で洗い、自分の服から袖の破き、足首に巻いた。

「これくらいでいい？」

いつの間にか、ちっこい妖精は木の枝を集めてきていた。

「いいわ。ちょっと、離れて。」

私は山積みしてある枝に向かって両手をかざす。

「ファイアボール（極小）」

両手の間の炎が大きくならないように気をつける。暫くすると、枝も燃えだしたようだ。

両手を解く。それから、ナスターシャを温かい場所へ移動させる。濡れた髪を拭く。顔の汚れを落とす。まだ、幼さが残る顔だ。白い柔らかい肌に傷が痛々しい。ただ、傷跡が残りそうなものは無い。落ち着くと呪文を唱える時に小声になった自分に苦笑した。小さい炎のイメージが声に出たようだ。

「妖精さん。何があったか詳しく教えてくれないかな。」

「わかったわ。妖精さんじゃ言いにくいでしょ。私はソーニヤと呼んでくれて構わないわ。そっちで寝ているのがナスターシャよ、クレア。」

名前を呼ばれたことに驚いた。それが、わずかに表情にでたよう

だ。
ソーニヤの不敵な笑みがそれを物語っていた。

0 章 - 2 (後書き)

ソーニャ：「キャラ設定が定まってないんじゃない。『たゆたう魂のうた』じゃなくて、『たゆたうあきら（自主規制）』にタイトル変更ね。」

0 章 - 3

「村が」

起きた時、そう叫んでいた。ソーニャはこちらを見て、黙って首を振る。涙がこみ上げてくる。

「ナスターシャ。大丈夫よ。あなたが来てから2時間くらいしか経っていないわ。」

空を見上げる。太陽は真上にあつた。ソーニャの方を見ると目をそらして肩を震わせている。先ほどとは違う意味で涙が出てきた。とりあえず、ソーニャは放っておく。

「ありがとう。えーっと。」

「クレアよ。」

クレアが手を差し伸べる。綺麗で、凜とした女性だった。少し戸惑い握手をした。

「ありがとう。クレア。」

気のせいかな、クレアの顔があかくなつたような気がした。

「はいはい。ばか面を笑顔で緩ませてないで早くドゥーニャのところにいくわよ。」

拗ねたようなソーニャの口調だった。村のことが心配になった私は、立ち上がろうとした。

「いつ！」

足に激痛が走った。足首に布が巻かれていることに気付いた。

「応急処置はしたけど、後でちゃんとした治療をしなくてはいいわね。私は回復系の呪文はさっぱりだから。」

そついうと、クレアは立ち上がり馬を呼んだ。近くで草を食んでいた馬がこちらへ駆けてくる。

「大人しいヤツを借りてきたから乗りなさい。その足じゃ歩くのは無理でしょ。」

クレアが、差し出した手を握り、起き上った。馬は私の横まで来て

大人しくしている。

「よろしく。」

撫でながら挨拶をし、騎乗する。

「早いところ行かないと陽が落ちるまでに間に合わないわよ。暗くなつてからだやツに分があるわ。」

ソーニヤが馬の頭の上に寝転がり話している。

「それに早くしないと、ドゥーニヤが一人で始めかねないわよ。」
言い終わると、欠伸をして眠り始めてしまった。眠っているから早く移動しろということだろう。

「じゃ、行きましょう。」

クレアが歩きだす。急いでいるようだ。私は初めての乗馬で落ちないように気をつけていた。

乾いた風が吹いていた。山間を抜けて広い草原へ出た。ここから北へ行くとガサの街、北東へ進むとストの村だ。そしてゴ布林達は、北東へ進む道の途中にいた。

「まずいわね。思ったより数が多い。それに、武装している。ゴ布林達の中に指導者がいるみたいね。街を襲う前に村で体制を整えるつもりなのかしら。」

クレアの言うとおり、ゴ布林達はそれぞれ武器を持っている。

剣、槍、弓と同じ武器を持った集団がいくつかあるようだ。そしてこちらに側にいるゴ布林は大きな盾を持って、横に広がっている。クレアの声から緊張が伝わってくる。

「これ以上は、近付くと危ないわね。ゴ布林の100や200なら魔法で蹴散らせると思っていたけど、後方は盾を持ったやつらが備えている。遠くからの魔法では防がれるわね。でも、こんな何も無い場所じゃ、近づけない。どうやら街にスクールから応援が行ったことがばれているみたいね。ゴ布林のくせに魔法使い対策するなんて、油断していたわ。でも、なぜ動かないのかしら、村を攻めるのなら・・・」

「動けないのよ。」

ソーニヤが目を擦っている。まだ、眠り足りないという感じだ。

「どういうことなの？」

「ドゥーニヤの罫に掛かっているはずよ。さて、私たちを追っていた奴らは戻っているかな？」

ソーニヤが見ている方を見る。集まっているゴ布林達と少し離れたところに3匹。それぞれの背中に木の蔓で『1』、『2』、『3』と番号が書かれている。

「ちゃんと、戻って来てるじゃない。偉い。偉い。」

目の前のゴ布林達にまったく動揺していないのか、ソーニヤの声は明るい。それどころか、これから起こること楽しみにしているようだ。

「クレア。あのゴ布林達。もらっちゃうわよ。」

クレアは黙っている。ソーニヤがニヤリと笑う。

「ドゥーニヤ。ここまではロジャーの言った通りに進んでいるわ。

ゴミ掃除開始よ。」

0 章・3（後書き）

ソーニャ「可笑しいわ。私って、可愛いマスコットの存在だって、聞いていたのに。これじゃ、ただの意地の悪い妖精じゃない。契約違反よ。断固抗議するわ」

0章 - 4

「ひとつ・・・ふたつ・・・」

それは、とても清んでいて、よく透る声だった。それでいて、抑揚がなく、感情を感じられない声だった。一定の間隔で数えられていく。それから少し遅れて、ゴブリン頭が飛び、血しぶきが上がる。一匹ずつ。同じ感覚。そして、確実に血しぶきが上がっていく。その血しぶきの中を黒い影が移動してく。ソーニヤと同じくらいの大きさ。黒い着物を着ている。ゴブリンの肩に乗る。手から出た黒い霧がゴブリンの首を包む。次のゴブリンの肩へと飛ぶ。頭が飛ぶ。血しぶきが上がる。赤と黒の中で整った顔が見える。すぐにわかった。あれが、ドゥーニヤだ。淡々と頭を飛ばしていく。首を飛ばされたゴブリンの身体は暫く血を噴き出し、その場で直立している。ソーニヤと目が合った。ソーニヤがこちらの感情を見透かしたように笑みを浮かべる。

「大丈夫そうね。少し近付きましょう。」

目の前で起きていることに思考が追いつかない。表情には出さないようにするだけで精一杯だった。ソーニヤは、目の前の惨劇に何の感情も抱いていないようだ。ナスターシャは目を背けている。

「あの辺りまでは大丈夫。」

ソーニヤが指をさした先に目をやる。どうやら地面に魔法陣が書かれているようだ。魔法陣は円形でゴブリン達の中心から半径500mほどはある。円の中のゴブリン達は動くことができていない。まるで巨大な蜘蛛巣のようだ。これほどの規模の魔法陣はスクールの魔術師でも作れる者そんなにいないだろう。

まだ、血しぶきは上がり続けている。一定の間隔で数えられていく声に背筋が凍りつくようだ。方々でゴブリン達の悲鳴が聞こえる。逃げようにも逃げられず、血しぶきが迫ってくる恐怖。ゴブリンに同情する。

「五月蠅い。耳障りな声で鳴かないでほしいわ。」

ドゥーニヤが数えるのを止めた。黒い霧が騒いでいたゴブリン達に伸びる。一瞬の静寂が訪れる。一瞬の静寂は一斉に噴出した血の音で破られた。

「どこまで数えたかわからなくなったわ。ソーニヤ。」

ソーニヤが少し高い位置まで飛ぶ。

「今ので、477ね。まだ、200近く残っているみたい。」

ドゥーニヤはため息をつき、再びは首を刎ねる。大地はゴブリンの血でどす黒く染まっている。風に乗って咽返るような血の臭いがした。

「ソーニヤ！お願い。ドゥーニヤに止めるように言って。」

ナスターシャの声は震えていた。顔は青白くなっている。

「ダメよ。ナスターシャ。ここで全滅させないと。いつ、村に危険が及ぶか、わからないわ。」

「感じるの。ソーニヤ。何か暗いものが大きくなっているの。お願い。」

ソーニヤの表情に一瞬、悲痛な思いを感じた。

「やっぱり、わかるのね。でもダメよ。」

ナスターシャは、呼吸をするのもやつとという感じだ。ナスターシャの様子で私は確信した。

「ソーニヤ。何を知っているの？何を考えているの？」

聞かなくても予想はついていてた。それでも、私は聞かずにはいられなかった。数日前から。蠅王の紋章を聞いた時から。期待していた。私がスクールで数少ないAランクに上がるための標的。そしてナスターシャはその存在を感じ取ることができるようだ。

「もう少しよ。見ていたらわかるわ。」

そう言つてソーニヤは視線をドゥーニヤの方に移す。

「これで、650。」

ドゥーニヤは、数えながら首を刎ねると、動きを止めた。整った顔からは疲れは感じない。黒い着物は返り血を浴びることもなかつ

たようだ。ゴブリンは残り数匹になっていた。その中に神官のような服装のゴブリンがいる。あれがこの軍を指揮していたのだろう。手には髑髏がついた杖を持っている。残りの数匹は騒かずにドゥーニヤを睨みつけている。ドゥーニヤの表情が一瞬不快そうに歪む。黒い霧がゴブリン達の首に絡みつく。頭が宙に舞う。残りは神官だけになっていた。

「ワレヲ コロスガヨイ イケニエニ ニンゲンドモヲ マキコメナカツタノハ クチオシイガ」

話しを最後まで聞かず、ドゥーニヤは首を刎ねていた。

「どうでもいいけど、息が臭いのよ。」

宙に舞ったゴブリンの顔は笑みを浮かべたままだった。

「来る。クレア、後は頼むわ。バラバラにしてやって。ナスターシヤは少し離れなさい。」

ソーニヤは、馬の手綱を引っ張り後方に下がる。ゴブリンの身体が倒れる音が聞こえた。手にしていた杖の髑髏に、ゴブリン達全員の血が集まっていく。はつきりと髑髏から禍々しいものを感じる。冷たい汗が噴き出してくる。足が震える。髑髏を中心として血が巨大なゴブリンの形をとる。ドゥーニヤは巨大ゴブリンから少し距離をとった。私も巨大ゴブリンの動きに集中する。ドゥーニヤが先に仕掛けた。黒い霧が大きな鎌の形になる。脚を切断したかのように見えた。しかし、血液でできているゴブリンの身体は元に戻っていない。

ゴブリンは大きく振りかぶり、ドゥーニヤに殴りかかる。ドゥーニヤはギリギリの所で交わしている。ドゥーニヤがこちらに視線を向けているのに気付いた。どうやら、ゴブリンの攻撃を引きつけてくれているようだ。こちらに攻撃がこないと分かれば強力な呪文が使える。こういう得体の知れない強大な敵には、出し惜しみをしている余裕はない。精神を集中し、術式を展開していく。巨大ゴブリンの足元に魔力を集中させる。

「風の妖精、エーリアルよ。歌え。舞え。」

ゴブリンの足元の魔法陣が光輝く。ドゥーニヤが回る。跳ぶ。ゴブリンは態勢を崩した。今だ。

「テンペスト！」

ゴブリンを風の柱包み込む。風の刃が切り刻む。血液でできたゴブリンの身体は小さく分かれ宙に舞う。自分が得意とする風系統の最強呪文だ。まだ、術式を完成させるまでに時間がかかるのと、唱えた時に袖が破けるという問題があった。

「こんなことなら、完成させておくべきだったわね。」

ナスターシャの治療で破いた袖が、更に先まで破けている。また、服を買いなおさないといけない。そんなことを考えていた。

「ナスターシャ。今よ。」

後ろの方からソーニヤの声。光が空中で弾ける。

「外れた。クレア。まだ、終わってないわ。」

光が弾けた先に髑髏が見えた。目が妖しく光る。落ちていく髑髏にバラバラになった巨大ゴブリンが集まっていく。今度は人型ではない。脚が6本生えていく。大きな頭、胸、腹。羽が3対。目が赤く光る。蠅王だ。

「クレア。もう一度。バラバラにして。」

ソーニヤが叫んでいる。その横には、ナスターシャが杖を持ち、なんとか立っている。

「やるしかないようね。」

ソーニヤに答えるというよりは自分に言い聞かせていた。ドゥーニヤが切りかかっていた。脚を一本切り落とす。どうやら、足と羽は液体から固体になりつつあるようだ。羽がゆっくりと動き出す。

「飛ぶつもり？ドゥーニヤ。動きを止めて。」

「もうやってるわ。聞かないのよ。」

ソーニヤとドゥーニヤの声に焦りが感じられる。こうなる前に終わる予定だったのだらう。蠅王の足元には、ゴブリン達の動きを止めていた蜘蛛の巣のような魔法陣が光っている。

「足は私がやるわ。ドゥーニヤは羽を」

ソーニヤの周りに魔法を使った痕跡が光る。蠅王の足に草が絡みつく。バインドの呪文だ。ドゥーニヤが切った足はすでに再生している。

再生が早すぎる。ソーニヤとドゥーニヤは動きを止めるので精一杯だ。蠅王が飛んだら、動きを止めることはできないだろう。足の震えが止まらない。蠅の姿になってから黒い威圧感が身体を襲っていた。少し離れた自分ですら膝をつきそうになる。ドゥーニヤの動きは確実に悪くなっていた。絶望的な状況だ。暗い感情に支配されつつあった私を光が元に戻した。ナスターシャが魔法を放つチャンスを待っている。顔色は良くないが、落ち着いて構えている。ナスターシャが作り出す光の球が太陽のように温かく感じる。まだ、戦える。それに、私は本当の絶望を知っている。全てを失ったあの日を。何の力を持っていなかったあの頃を。

私は動きを止めた蠅王を中心に術式を展開する。魔力を集中する。バインドが破られようとしている。ドゥーニヤが跳ぶ。鎌が羽を両断する。ソーニヤがさらにバインドを唱えたようだ。草が蠅王の全身に絡みつく。私は更に魔力を集中する。蠅王の足元の魔法陣が輝く。その周りに帯状の魔法陣が輝く。ドゥーニヤの鎌が頭と胸の間に刺さる。私はまだ魔力を集中する。指の先に痛みが走った。ドゥーニヤが跳ぶ。溜めた魔力を解き放つ。

「テンペスト！」

叫んだ。自暴自棄だったのがわかる。魔力を制御できずに、はね返ってくる。手に痛みが走る。氣力を振り絞る。蠅王は風の刃に包まれた。徐々に宙に舞い上がり刻まれていく。

風の柱が収束する。髑髏がどこにいったのか探す。すでに陽は落ち見えない。ナスターシャの方を見る。見えたようだ。いや、感じたのだろう。杖を振りかざす。光球が矢のように飛んでいく。髑髏の額を打ち抜いた。ドゥーニヤが跳んだ。髑髏が2つ、4つと切られる。ドサツと音がした。ナスターシャが倒れていた。駆けよる。

「眠っているだけみたいね。」

ソーニヤが安堵のため息をついた。私は手を差し伸べようとして止めた。手に感覚がなかった。まだまだ、テンペストの完成には時間がかかりそうだ。

「ヨクモ ワレラガ ヒガンヲ キサマラモ ミチヅレダ」
声をした方を振り向く。ゴ布林達の死体が集まっていく。

「しつこいわね。これだから、不細工なヤツは嫌いなよ。」
「キサマ」

ゴ布林ゾンビはドゥーニヤに襲いかかる。ドゥーニヤは、交わし鎌で切り付ける。しかし、刃が通らない。

「キサマガ コロシタ ドウホウ スベテノカラダダ ソノテイ
ドノ コウゲキナド。」

「痛みも感じないなんて、どうしようかしら。」

ドゥーニヤは攻撃をせずに避けることに専念している。ゴ布林ゾンビはここぞとばかりに攻撃を続けている。完全に標的はドゥーニヤ1人だ。

「ドゥーニヤは、魔力が残ってないみたい。」

最初に大きな魔法を使ったから。」

ソーニヤも困った感じで話しかけてくる。蠅王の姿になった辺りから思惑と違ったのは確実だろう。ただ、焦った感じはもうない。私も少し落ち着いていた。さっきドゥーニヤが切り付けた傷が再生していない。ゴ布林ゾンビは避け続けるドゥーニヤに怒り心頭という感じだ。ドゥーニヤが一人でゴ布林達を殺したのは全ての攻撃を一人で引き受けるためだったのかもしれない。

「クレア。ドゥーニヤが元気な内に隙をみて仕掛けるわよ。」

ソーニヤが小声で囁く。ナスターシャは倒れたままだ。ドゥーニヤが大きく跳ぶ。

「今よ。」

ソーニヤがバインドを唱える。草がゴ布林ゾンビの手足を封じる。ドゥーニヤが、ゴ布林ゾンビの頭に鎌を振り下ろす。

「ファイアボール」

ゴブリンゾンビの身体が炎に包まれる。手足を封じていた草が燃える。暴れまわる。

「さすがに、あれだけ大きいと一撃じゃ無理ね。」

ソーニヤの声に疲労が感じられる。私の魔力も残り少ない。テンペストのような強力な魔法は無理だ。アンデッドには炎か光の魔法だが、自分が見えるのは、ファイアボールだけだ。

「オノレ コノママ クチハテナルモノカ。」

ゴブリンゾンビが辺りを見渡す。ナスターシャが倒れている方を見て動きが止まった。

「アノコムスメ アノコムスメサエ イナケレバ ワレラガ アルジハ ヤラレハ シナカツタ。」

ゴブリンゾンビがナスターシャに向かって歩きだす。ソーニヤがバインドを唱える。ドゥーニヤが切り付ける。しかし、刃は弾かれる。体力も限界のようだ。私は覚悟を決めた。

まだ、出会って間もない少女のために。

残り全ての魔力を手に集める。両手の間の火球が大きくなる。

「この貸しは大きいわよ。私がAクラスに上がるまで、こき使ってやるんだから……。ファイアボール」

もはや、手の感覚はなかった。それでも、ゴブリンゾンビに向けて火球を投げつけていた。ゴブリンゾンビの身体に命中した。爆発。勝った。爆風が自分の所までとどいた。私はそのまま倒れこんだ。空は星が輝いていた。すでに感覚が無くなった手を伸ばす。ただ、星だけが見えた。一段と明るく輝く星をだけが。

0 章 - 4 (後書き)

ソーニャ「ドゥーニャ、なんかチートな強さになったわね。」

ドゥーニャ「作者も予定外らしいわよ。でも、私の出番はしばらく無いらしいから」

ソーニャ「あれじゃない？人気投票で上位になったら再登場ってやつ」

ドゥーニャ「人気投票するまで、この小説は続くのかしら？」

ソーニャ「続かないわね。作者がヘタレだから。だいたい、この(自主規制)小説を誰が読むのかしら」

ドゥーニャ「誰も読まないわね。こんな稚拙な文章。あら、ソーニャ。あなた次の場面の準備をしないと」

ソーニャ「もうこんな時間！急がないと朝になっちゃうじゃない。

じゃ、ドゥーニャ。またね」

夢題

声が聞こえる。

「姉さん。ルシフェルは役に立っているかい？」

子供っぽい男の子の声だ。

「ええ。ルー君のおかげで調査は順調よ。今も、あの星に降りて頑張ってくれているわ。」

優しい女性の声だ。

「よかった。姉さんのためにもう一体作って来たんだ。ルシフェルを元にして。全体の能力は下がったけど、すばしっこいヤツなんだ。また、名前を付けてあげてよ。」

「まあ、可愛い子ね。うふふ。無邪気に飛び回って。そうね・・・。ベルゼブブという名前がいいわ。」

「よし、ベルゼブブ。今日からお前は姉さんの言うこと聞くんだ。」

「うふふ。よろしくね。ベルちゃん。」

「姉さん。あと、僕が使うために4体作ったんだけど、こいつらも、姉さんに決めてもらって良いかな？」

「まあ、こんにちは。この子たちも翼が6枚あるのね。じゃあ、どうしようかしら。うーん。そうね。よし。決めた。このしっかりしてそうな子がミカエル。隣の大人しそうな子がガブリエル。賢そうな子がラファエル。やんちゃそうな子がウリエルね。どう？」

「うん。いいと思うよ。」

「よろしくね。ミカエルくん、ガブリエルちゃん、ラファエルくん、ウリエルくん。ベルちゃんとも仲良くしてね。」

「よし、ミカエル、ラファエル、ウリエルは自分の仕事に行って良い。ガブリエルはここでメモの手伝いだ。」

「そつえば、メモが言っていたわね。生命の樹から新しく生まれそつな子がいるでしょう。今度はどんな子かしら。」

「今度は、小さいヤツがいいな。この前のバハムートみたいなのが増えたら、船の中が狭くなっちゃうよ。」

「うふふ。早くあの星に降りれるようにしないといけないわね。ベルちゃんもルー君を手伝ってもらおうかしら。その前にシンとメムを紹介しようか？メムは後でここに来ると言っていたわね。じゃあ、先にシンに会いに行きましょう。シンはバハムートちゃんの所かしら？」

「そうだよ。ガブリエルはここでメムが来るのを待て。さあ、行こうか。姉さん。」

笑い声が遠ざかっていく。静かになった。まだ、眠たいようだ。意識がまどろんでいく。

0 章 - 5

目を覚ます。いつもの孤児院の天井だった。起き上ろうとする。身体が重い。意識がはつきりしない。

「やっと、起きたのね。」

ソーニヤのいつもの明るい声だ。

「あれから3日も寝てたのよ。このねぼすけ。」

「あうっ。」

おでこを指でつつかれた。ソーニヤはいつもの悪戯な笑みだ。ちよつと、目の下に疲れが見える。

「ふえー、いたーい。」

ほつぺたを引つ張られた。そして、横に縦に引つ張られる。

「相変わらずしまりの無い顔ね。」

ソーニヤは、息をついた。ちよつと、安心したような笑顔を見せる。つられて私も笑顔になる。

「痛っ。」

ソーニヤが手を離す前に横に強く引つ張った。ほつぺたが熱い。

「いつまでも夢心地にいるから、起こしてあげたのよ。痛いから夢じゃないでしょ。」

「そうだ。クレアは？」

「昨日、旅立って行つたわ。」

ソーニヤが優しく微笑む。

「そう、お礼を言いたかったのに。」

「用事を済ましたら、また来るそうよ。」

「本当に？よかった。」

「みんなに、目が覚めたこと。教えてくるわ。あと、なんか食べるわよね？」

「うん。」

「わかった。持ってきてあげるから、寝てなさい。」

ソーニヤが部屋から出て行くと、独りで天井を眺めた。3日前の出来事を思い出す。ゴブリンから逃げ、クレアに出会った。そしてゴブリンの血で出来た怪物と戦ったこと。生き延びることができたのが夢のようだった。しかし、夢では無いとほつぺたの痛みが教えてくれる。そう夢では無い。ただ、魔法を唱えるクレアの姿を思い出すと夢だったのではないかと思えてくる。白く細い手をかざし、緑色に光る魔法陣。その光が広がり、長い黒髪をなびかせて、魔法を放つ。あの時は、その後ろ姿が頼もしかった。クレアとは、もっと話しがしたいと思った。

「ナスターシャお姉ちゃん。起きたの？」

「私が持つてく。」

子供たちの声が聞こえる。みんな心配してくれたみたいだ。

「気分はどうだい？」

「大丈夫みたい。ありがとう。シスター。」

シスターは孤児院の母親のような存在だった。以前、笑うと目じりに浮かぶシワがチャームポイントだと言っていた。シスターはベツドの横にある椅子に腰かけた。スープの良い香りがする。

「食欲はあるみたいね。」

私はスープを受けとると、1口、2口とスプーンを口に運んだ。

温かいスープが身体に沁みこんでいく。

「みんな、心配していたんだよ。全然起きないんだから。ソーニヤは詳しく教えてくれないし。」

ソーニヤはあの出来事のことを話していないようだ。私も話すベきか迷った。まず、どう説明してよいのかわからなかった。シスターが私の顔を覗き込む。目尻にシワが浮かぶ。

「話したくなった時に、話してちょうだい。」

暫く、シスターは何も聞かず、隣で微笑んでいた。私は残りのスープを最後まで飲みほした。

「さて、そろそろソーニヤを助けてあげないとね。」

「ありがとう。シスター。」

シスターは一度笑顔を見せると部屋を出て行った。暫くして、ソーニヤが部屋に飛び込んでくる。髪がボサボサになっている。

「あいつら、ゴ布林より厄介だわ。」

ソーニヤは子供の相手が苦手だった。この孤児院には、12年くらい前に来た私たちと4年前に来た子たちが暮らしていた。まだ小さい子たちはソーニヤへの遠慮がない。いきなり掴みかかって来る子供たちは、ソーニヤの天敵だった。ドゥーニヤはそれを嫌ってか孤児院にいる時は姿を隠している。口は悪いがソーニヤは良い子だ。

「あー、イラつくわ。」

「キャツ。」

顔に衝撃が走った。ソーニヤの足が顔にめり込んだ。

「ナスターシャ。ニヤニヤして。そんなに私が遊ばれているのがうれしいのかしら？」

口だけではなく、足癖も手癖も悪い。でも、良い子だ。きつと。

「元気になったなら話したいことがあるの。出かけるわよ。」

「どこに？」

「ゴ布林達がいたところまでよ。あの杖も持ってきてなさい。」

「ちよつと、待ってよ。ソーニヤ。」

起き上ると杖を取って、ソーニヤの後を追う。まだ、身体が重い。シスターと子供たちと少し言葉を交わし、孤児院を出た。陽の光が眩しい。外では私と同じくらいみんなが畑で仕事だった。みんなが声をかけてくれる。私は元気になったことを、手を大きく振って知らせる。みんなの笑顔が好きだった。孤児院に住むみんなは私の家族なのだ。

村を出て、ゴ布林達がいたところまで歩いた。

「ここで良いわ。」

「えっ」

ソーニヤが動きを止める。自分の目を疑った。ゴ布林達が倒れていたところは何も無かったかのように、草が生い茂っていた。

「片付けるのは大変だったのよ。誰かさん達は倒れるし、ドゥー

ニヤは手伝わないし。」

ソーニヤは肩を押さえて疲れたという仕草をしながら言った。そうは言っても、ここから見える一面に死体が転がっていたはずだった。思い出しただけでも気分が悪くなってくる。ソーニヤがこちらを見てため息をつく。

「ナスターシャ。あの時、髑髏を狙って、魔法を使うように言ったこと覚えているわよね？」

ソーニヤが見ている方向には地面が大きくえぐり取られた跡が二つあった。クレアがテンペストを使った後だ。離れている方の跡が明らかに大きい。あの時、一度目は当たらなかった。テンペストで巻き起こった風は、地面ごとゴブリンを引き裂いた。ゴブリンの中から出てきた髑髏を狙った光球は舞い上がった土の塊に辺り届かなかった。

「ええ、覚えているわ。」

「もう一度、魔法を使ってみて。」

そう言って、ソーニヤは空高く緑色の球を投げる。

「2回目の時を思い出して。当てるだけじゃなくて、貫くの。」

2回目。バラバラになったゴブリンの身体は髑髏を中心に大きな蠅の姿になった。ただ、ゴブリンの姿より恐ろしい感じはしなかった。蠅の姿になった後、目が合ったような気がした。そして、その目はとても悲しげに感じられた。それに、目の前にはクレアがいた。私は髑髏に当てるだけに意識を集中できた。2回目のテンペストは巻き上がった地面を粉々にくだいた。蠅の中から飛び出した髑髏を遮る物は何もなかった。しかし、狙い定めて放った光球は一度外れた。風で髑髏が大きくそれたのだった。その時、当たるように念じた。風では曲がるような軟な当たりかたではなく、風を裂くような矢のように。

私はその時の感じを思い出す。杖の先に意識を集中する。杖の先に光球ができる。

「行くわよー。」

高く舞う緑色の球の一点に狙いを定める。杖の先から飛ぶ光は矢のように鋭く緑色の球に向かって飛ぶ。当たると思った時、緑色の球は横に動いた。光の矢はそのまま空へ消えた。

「はぁー、あの時のは、火事場のなんとかだったみたいね。」

ソーニヤが、肩を落とす。

「少し練習する必要があるみたいね。」

「ううー。」

ソーニヤに突かれる。

「まあ、まだ2回目なんだし、こんなものよね。まぐれでも、蠅の姿になったアレを退けたんだから」

ソーニヤは大きく穴の開いた方を見ている。その穴を見ていると否応にもあの時の光景が思い出される。山のような巨体、真っ赤に光る目。薄く透ける巨大な羽。そして、飛び立とうとする時に感じた、泣いている子供のような姿が強く思い出される。

「風が強くなってきたわね。そろそろ、戻るわよ。」

風はいつもと同じ緑の香りを運んでいた。

0 章・5（後書き）

ソーニャ「私って、かわいくないのかな」

ドゥーニャ「愛しのナスターシャのハートをクレアに射とめられて寂しいのね」

ソーニャ「だいたい、あきらが私の可愛さについて本文で触れないのがダメなのよ。」

ドゥーニャ「そうね。ソーニャの可愛さを表現するとしたらこんな感じがしら」

陽の光をあびて輝く悪魔蛙の血液のような、鮮やかな髪、
朝露で濡れた鬼蜘蛛の糸のような、繊細な羽、

無邪気に微笑むその笑顔は引っこ抜かれたマンドラゴラも絶句して裸足で駆けだすに違いない

ソーニャ「ありがとう。ドゥーニャ。もうあきらめたわ。」

0章 - 6

あの戦いから20日が経っていた。勝利した翌日、スト村の孤児院で目を覚ました。魔力を使い果たして倒れた私をソーニヤが運んだようだ。隣のベッドにはナスターシャが眠っていた。ナスターシャは眠り続けていた。外傷よりも初めて魔法を使ったせいだろう。私はナスターシャが目を覚ます前に村を出た。ガサの街に向かったスクール連中に簡単な連絡を済まし、スクールへと向かった。ゴ布林と蠅王についてレポートを提出するためだ。魔王を崇拜するゴ布林たちが妖しい秘術で蠅王の姿になったという程度のことだ。学長もこの意見に同意した。アレは本物に遠く及ばない存在だったということだ。それから、ナスターシャとソーニヤ、ドゥーニヤのことを報告した。ソーニヤ、ドゥーニヤのことを学長は知っていた。スクールでも数少ないランクA。その最下位であるイワンの使い魔だということだ。変人と呼ばれる男である。町外れにあるボロ家に引きこもっているため姿を見たものは殆どいないと言われている。噂しか聞いたことは無いが好きにはなれそうにない。ランクAといえば、皆から尊敬され、二つ名を持つ者ばかりである。スクール最強のドラゴンスレイヤーなど憧れと畏怖の念を込めて呼ばれている。そこまで考え、単純王、野獣など呼ばれている連中がいることを思い出した。所詮、暇な連中が面白がつて付けているだけだ。なぜなら、私は知っている。私のことを可哀そうな黒猫と言っていとヤツらいることを。噂のことはともかく、やはり、変人のことは気に食わない。あのドゥーニヤの戦い方。あの時、ゴ布林たちの動きを止めたのはドゥーニヤのバインドだ。見たことがない種類のバインドだったが、あれほど広範囲に使うには事前に準備していたはずだ。あの日に何が起こるか知っていたとしか思えなかった。そしてその計画の中に私が入っていた。利用されたのだ。気に食わない。今思えば、ゴ布林たちの中に蠅王の紋章が掲げられているという

のは誰からの報告だったのか。討伐隊に参加していない私の耳に届くはずが無い情報だった。それも街へ援軍にいった連中より早くにだ。なぜ、私を利用したかはわからないが私にも収穫はあった。ナスターシャだ。あの娘にはどういうわけか、蠅王の気配を察知できる能力があるようだ。このことはスクールへは報告していない。ただ、魔法使いの素質があるとしか報告しなかった。学長はナスターシャをスクールに入れることに決めた。魔法が使える者は貴重な戦力なのだ。スクールとしては出来るだけ多くの者を手元に置いておきたいという考えだ。Aランクともなれば、一人でドラゴンを相手にできるほどである。もっとも、ナスターシャがどれほどの魔法使いになれるかは未知数なわけだが。

ストの村が見えてきた。数軒の家と畑があるだけの小さな村だが、落ち着いた良い場所だ。私は、この場所からナスターシャを戦場へ連れ出そうとしている。村へ入ると青年たちが畑で作業をしている。年齢は私と同じくらいだ。好奇心な視線をこちらに向けている。20日前に会ってはいいるが、そんなによそ者が珍しいのか。

「きれいなお姉ちゃんだ。シスター、きれいなお姉ちゃんが来たよ。」

孤児院の中に向かって小さな女の子が叫ぶ。無邪気な笑顔で見上げている。見覚えがある。20日前に村を出る時に元氣よく手を振っていた子だ。私は馬から降り、女の子に挨拶をする。

「あら、クレアさん。お久しぶりね。中にどうぞ。」

女性が出てきた。シスターと呼ばれているが、どことなく近所をおばちゃんと言った感じがした。少し馴れ馴れしいとも思ったが、その笑顔を見えると心地よい感じがする。

「ナスターシャ、クレアさんよ。」

ナスターシャは洗濯したシーツを干しているところだった。

「クレア。」

ナスターシャが振り返り私の名前を呼ぶ。笑顔が太陽の光の元で一段と輝いて見えた。初めて会った時はボサボサの髪で身体中に土や

葉っぱがついていて、男の子かと思った。今は、質素だが清潔な服装で、元気な女の子に見える。

「見つめあってるんじゃないわよ。」

ソーニヤが間に入ってきた。相変わらずナスターシャの周りを飛び回っているようだ。

「ナスターシャ、あまりクレアを信用しちゃダメだからね。この女、倒れた後、手を空に伸ばして『これでナスターシャは私のものよ。こき使ってやるわ。ぐへへへ』なんて言ってたのよ。いやらしい手つきでナスターシャのこと、こねくり回してたに違いないわ。」
ソーニヤが何やらクネクネしながら言いだした。完全に否定できない。ナスターシャが困惑した表情になる。

「まあ、ナスターシャには、こねくり回す胸なんか無いけどね。」
ナスターシャが落ち込んでいる。表情が読み易い子だ。ソーニヤがますます調子に乗ってクネクネ身悶えている。不意にソーニヤが声にならない悲鳴を上げる。シスターに捕まえられている。

「カーチャ。ソーニヤとあっちで遊んであげなさい。」

「わい。」

先ほどの女の子はソーニヤを両手で掴むと駆けだしていった。ソーニヤの口が『助けて』と動いた気がした。数人の子供たちが元気に走り去っていく。

「さて、静かになったわね。」

シスターは笑顔を見せる。子供を何人も育ててきた逞しさだろうか。最初の優しい印象とは別に強さを感じる。

「クレア、怪我は大丈夫だったの？」

ナスターシャは、私の手を心配しているようだ。手の怪我は完治していた。治癒の魔法のおかげで傷が残ることもなかった。私としては破れてしまった服の方がシヨックだった。

「大丈夫よ。ほら、このとおり。あなたの方こそ目を覚まさなくて心配していたのよ。」

ナスターシャが表情が変わる。安心した表情。すこし照れたような

表情。本当に分かりやすい。

「ナスターシャ。クレアさんは長旅で疲れているだろうから。客間で休んでもらったらどうかしら。客間と言っても何も無い所で悪いけれど。」

「いえ、シスター。私はすぐに立ちますので。このままで用件だけを。シスターにも聞いてもらえると助かります。」

ナスターシャが一瞬、残念そうな表情を浮かべ笑顔をこちらに向け
る。

「ナスターシャ。貴女にスクールへ入って欲しいの。」

「えっ」

ナスターシャは困惑した表情を見せる。

「現状では魔法が使える者は、スクールに入るか監視下に置かれるのがほとんどなのよ。貴女はスクールに入れる年齢だし、素質もあるわ。あつちでの家はスクール側で用意する。ただ、危険な仕事で命を落とすこともあるから入らなくてもいい。どうかしら。」

「入りたい。けれど・・・。」

ナスターシャはシスターの方を見ている。シスターはため息をつく。
「行つてきなさい。子供たちのことなら心配いらないわ。自分たちでいろいろ出来る歳になったわ。スクールで頑張つて稼いできなさい。そして、ここに送つて来るのよ。イワンなんて最初だけよ。あの変な妖精を寄こしたきり音沙汰ないんだから。」

シスターが豪快に笑っている。

「うん。ありがとうシスター。」

「決まったわね。私からスクールに伝えておくから、数日したらスクールから正式な書類が届くと思うわ。字は読めるかしら」

「読むのは大丈夫よ。書くのは苦手だけど。」

「わかったわ。一応、説明する人間をつけておくわ。詳しくはその人に聞いてちょうだい。」

ナスターシャが即決すると思っていなかった。断つてほしいという思いもあった。しかし、ナスターシャはスクールへ入ることを決め

てくれたのだ。嬉しいと思うことにした。

「ナスターシャ。貴女、スクールへ入ったら私と一緒に仕事しない。破れた服と火炎石の分、貸しがあるのよ。」

「わかったわ。クレア。よろしく。」

冗談で言っただつもりだったが、ナスターシャは嬉しそうな顔で約束してくれた。それから、しばらく話をした。ソーニヤの悲鳴が聞こえる。ナスターシャと目が合う。笑う。こんなに心の底から笑うのは初めてだった。太陽が眩しい。雲ひとつない空だった。

0 章 完

0 章・6（後書き）

ソーニャ「これって、クレアは死んでいて。幽霊って落ちよね。」
ドゥーニャ「あきらが、セクシー要員を殺すわけないじゃない。」
ソーニャ「だって、小説のタイトルがアレよ。絶対、死んでるって」
ドゥーニャ「あなた、本当にクレアに嫉妬しているのね。まあ、胸とかあなたには・・・」
ソーニャ「いいのよ。私は可愛い要員なんだから・・・あきら、可愛い要員でいいのよね？ いいのよね？」

1章 - 1

今日、何度目かのため息をつく。

お父様から呼び出しがあった。縁談の件だ。そう確信していた。幼いころからポワチ工家に嫁ぐことが、メデイスとポワチ工の両家の間で決まっていた。私も今年で13になる。民を守るのは貴族の役目。そう言つて、スクールに入れさせてもらった。実のところ、名家のポワチ工家に嫁ぐしかないという運命から逃げていただけなのかもしれない。

「フィリア様、馬車の用意ができております。お急ぎください。」
ドアをノックする音に続きジェラルルの声が聞こえる。ジェラルルは代々メデイス家に仕える騎士の家系で、私より一つ歳が上だった。昔は、兄のように思っていた。

「今、行きます。」

悩んでも仕方がない。ロザリオを首にかけて部屋を出た。

馬車は貴族の屋敷が並ぶ北東地区から南門へと進む。ユーサイキアはスクールを中心に栄えていた。スクールを見るのも最後になるかもしれない。そう思いスクールを見て回れるようにジェラルルに頼んでいた。ジェラルルは馬車の前を白馬に乗りゆつくりと駆けていた。馬車は別の従者に任せてある。鐘の音が聞こえる。小鳥が青空を飛んでいく。スクールの中にそびえ立つ礼拝堂からだ。2年間、祈りを捧げてきた場所だった。ロザリオを握りしめる。心が落ち着いていた。

馬車が方向を変えた。賑やかな声が聞こえてくる。南門から中央に伸びる大通りは店が立ち並び賑やかだ。窓から見える人々の表情は明るい。スクールがあるこのユーサイキアではモンスターに怯えることはない。しかし、自衛手段の無い小さな町や村は襲われることが度々あった。スクールの活動の一つはそういった町や村を守ることだ。そして、最近モンスターの活動が活発化している。

南門へ付いたようだ。馬車が止まった。ジェラルは守衛と話をしている。一人の少女が門を通ってきた。立ち止り辺りを見渡す。驚いている表情が面白い。瞳も口も全開にしている。この街へ来るのは初めてなのだろう。可愛らしい容姿に反して背中に槍のようなものを背負っている。よく見ると槍にしては少し短い。杖なのだろう。ということは、あの少女もスクールに入るのか。この時期に入ってくるということは既に魔法が使えるのだろう。ほとんどの者は決められた時期に入る。時々、魔法が使える人材がスカウトされ遅れて入って来ることがあった。とは言っても、スクールが有名になっただけはあまりいなかった。

「きゃっ」

気付くと少女が倒れていた。こちらに向かって男が走って来る。手に小さな袋を持っている。

「セバスチャン。ちよつと、待っていて。」

私は馬車から飛び降りた。セバスチャンの慌てふためく声が聞こえる。男を止めようと構えたその時だった。男の足に蔓が絡まる。男はそのまま倒れた。手に持っていた小袋が私の足元に落ちた。

「おりゃ〜。」

迫力のある女の子の声だ。立ちあがろうとした男が派手に転げた。所の周りを小さな妖精が飛びまわっている。あれが声の主のようだ。頭の上にピョッコつと出た髪の毛が角のように見える。

「ソーニャ。待って、やり過ぎだよ。」

さっきの少女が妖精を止めっている。

「ごめんなさい。大丈夫でしたか？」

少女が男に手を差し伸べる。男はその手を払いのけた。

「くそ、なんだこの虫。覚えてろよ。」

男はそう言い捨てると走って逃げていく。

「む、虫。誰が虫だ〜。」

妖精が追いかけてく。少し離れた所で飛び蹴りをくらった男が吹っ飛んだ。

私は足元に落ちていた小袋を拾った。見かけより重い。中は精霊石だ。スクールに入る時の身分証明書のようなものだ。

「その貴女、これは貴女のかしら」

少女が駆けつけて寄って来て、頭を勢い良く下げた。

「ありがとうございます。よかったです。それがないと、私」

息を切らしながら、話そうとする少女を手で制した。

「気をつけなさい。精霊石は高価なものだから、先ほどのような輩に狙われたら大変よ。それにちょっと眼立ち過ぎたかしら」

私は微笑んで、目線を周りに向けた。野次馬が集まっている。主に目立っていたのは妖精の方だが。

「あなた、名前は？」

「ナスターシャです。」

「そう。ナスターシャ。私はフィリアよ。」

「フィリア様。」

ジェラルルが駆けしてきた。

「どうなさいました？」

「なんでもないわ。さあ、行きましょう。またね。ナスターシャ。」

「は、はい」

馬車の方でセバスチャンが安堵の表情を浮かべている。

「お嬢様。爺は寿命が縮まりましたぞ。」

「うふふつ。ごめんなさい。セバスチャン。」

セバスチャンの顔が弛む。

「なんかすつきりした様子で。爺は嬉しゅうございます。」

知らない間に心配をかけていたようだ。ジェラルルの表情も屋敷を出る前より明るく見える。

「くそ、次会った時は息の根を止めてやるわ。」

ソーニヤと呼ばれていた妖精が戻ってきていた。まだ、怒りは収まっていないようだ。ナスターシャはソーニヤをなだめている。

「可愛い子でしたね。フィリア様の小さい頃を思い出しました。8年くらい前でしょいか」

8年前というジェラルルの事を兄さんと呼んでいたころだ。思い出して顔が少し熱くなる。ちらつと、隣のジェラルルを見上げる。いつから兄さんと呼ばなくなったのか。あの頃に戻りたい。

「決めたわ。お父様と話をするわ。さあ、ジェラルル。行きましよう。」

礼拝堂の鐘の音が聞こえる。小鳥が飛んでいく。どこまでも。

1章・1（後書き）

ソーニヤ「とうとう1章に突入よ。きつと、これから本格的に物語が進んでいくのよ。」

ドゥーニヤ「まあ、あなたは”虫”扱いされていたただけだね。」

ソーニヤ「ホント、私の扱いがだんだん酷くなってきてない？ところで、ドゥーニヤ。私たちって、今は離れているところにいるけれど、会話してていいのかしら」

ドゥーニヤ「いいのよ。私たち0章でも離れた所で連絡してたじゃない。私、本編じゃ出番が無いからここで目立つわ。再登場の時に”誰？”って言われるのだけは嫌なのよ。」

ソーニヤ「わかったわ。一緒に次話からネタばれして行くのよね。じゃ、」

ソーニヤ&ドゥーニヤ「また、来週」

1章 - 2

ラウンドストーンというパブを探しながら通りを歩いていた。このコーサイキアでお世話になる場所だ。ラウンドストーンを見つけるのには苦勞していた。街は広いし、人が多い。ストの村とは比較にならない。身長が低いので周りの人で建物が見えない。それに、文字を読むのもあまり慣れていなかった。看板の文字を読むために立ち止りながら移動していた。ソーニャは虫扱いされた怒りよりも好奇心が勝ったのか辺りをきよるきよる見ている。

「ナスターシャ。」

不意に名を呼ばれた。振り向くと知らない女性がそこにいた。

「やっぱり。私はアン。ラウンドストーンの定員さ。店長に言われて迎えにきたよ。」

この時、私にはアンが女神のように見えた。知らない街でかなりの時間を迷い歩いていたからだ。

「ありがとうございます。でも、どうして私がナスターシャだとわかったの？」

「さつき、あんた達、南門の所でひと騒動あったらしいじゃないか。店の客が話していたんだ。アホみたいな妖精を連れた女の子が賊に襲われたのをメデイス家のお嬢様が助けたってね。それを聞いた店長が嫌な予感がするから迎えに行くように言っただけさ。まあ、妖精を連れてくる人間なんて滅多にいないからね。」

メデイス家のお嬢様というのがフィリアのことみたいだ。実際にあの男の人を倒したのはソーニャだけど、フィリアが助けたことになっっているようだ。

「ちよつと、おばさん。誰がアホみたいな妖精なのよ。」

ソーニャはそう言い放った途端、顔を思いつき掴まれていた。

「誰が、おばさんだ。私はまだ10代だ。今度、おばさんって言いやがったら、その頭に咲いているアホみたいな髪をムシリとってや

るから覚えてな。」

「え？」

私は10代と聞いて思わず声が出てしまった。アンが鬼のような形相でこちらを見た。血の気が引く。私は慌てて誤魔化そうとした。

「いいかい？」

アンがソーニヤに念を押している。ソーニヤは肩を震わせながら、顔を縦に振る。それを見てアンが手を話した。表情も元に戻ったようだ。

「だいたい、アホみたいな妖精と言ってたのは客だよ。どうせ、なんかやらかしたんだろ？」

「あはは。」

ソーニヤが男の人を執拗に追い回していたのを思い出して、私は笑うしかなかった。

「まあ、立ち話もなんだから。早くラウンドストーンに行きましょう。」

ラウンドストーンは南門の通りから1本離れた通りにあった。入口に木の看板がかかっている。移動している間、ソーニヤは項垂れていた。よほど恐ろしかったのだろう。私を案内してくれた女神のような人は絶対に怒らせてはいけない。それだけは心に刻み込んだ。

「クリード。連れて来たよ。」

「ああ、遅かったね。」

「なかなか見つからなくてね。」

店の中は木のテーブルがいくつか並んでいて、数人の男の人たちが賑やかに食事をしていた。店の中を見渡していると、カウンターの奥からクリードと呼ばれた男の人が手招きする。アンは既に別の客の相手をしていた。

「マスターシャだね。僕はクリードだ。この店のマスターをやっている。まあ、細かい話しの前に何か食べるかい？」

答える前に、お腹が空腹を訴えていた。街の中を長い間迷っていたのだ。それに奥から良い香りがしている。お腹の大合唱に顔が熱く

なる。

「良い返事だ。そこに座って、待ってて。ソーニヤも食事はするんだっただけかな？」

ソーニヤは目を輝かせて頭を何度も振った。ソーニヤもお腹が減っていたようだ。クリードは笑顔を見せた。鍋を火にかけたようだ。良い香りがさらに広がる。ソーニヤは嬉しさを全身で表現している。私も口元が自然と綻ぶ。ふと、厨房の方へ向かう影が見えた。身長は1メートルくらいで、茶色い服をすっぽり被っている。手には食器を抱えている。

「お、テキさん。これカウンターの女の子に頼むよ。」

奥からクリードの声が聞こえる。テキさんはゆっくりと運んできてくれた。野菜がたくさん入ったスープとパンだ。ソーニヤにも小さい器で同じものが用意されていた。

「ありがとうございます。テキさん？」

テキさんは何事もなかったように仕事に戻って行った。

「ブラウニーのテキさんだ。珍しいだろ。って、ソーニヤを見慣れているナスターシャには珍しくなかったか。おっと、冷える前に食べてくれ。」

「はい。いただきます。」

大きく切つてある野菜を口に頬張る。

「美味しい。」

思わず声がでた。クリードは微笑んでいる。

「ん。スープは美味しいわね。パンの方はいまいちかしら。」

いつの間にか、ソーニヤは食べ終わっている。

「ははは、ソーニヤは厳しいな。」

クリードは苦笑している。

「ん？なんであんな私の名前知ってんのよ。」

「そうか、覚えてないか。君が生まれた時、僕も側にいたんだけど。イワンからは何も・・・聞いてないか。」

「ふん。覚えてない・・・わね。」

ソーニヤのフォークが私のスープから野菜を浚っていく。

「あゝ、私の・・・。」

話の方に気を取られていた私は、成す術もなくソーニヤの口に消えていく野菜に涙を呑んだ。ソーニヤの小さいからだのどこに収まるのか。本当に妖精なのか疑いたくなるほど食い意地が張っている。

「客もひと段落したようだし、少し話をしようか。」

そう言いながら、クリードはコップにミルクを注ぎ店の端っこの席に置いた。他のテーブルの客は食事は終わり談笑しているという感じだ。

「私も、私も」

ソーニヤは大きく手を振っている。飛んでいることが多いソーニヤが座っている。ミルクが入る余裕があるのか心配になるほどだ。相当ここの食事が気に入ったのだろ。クリードは二つコップを出してくれた。

「ありがとう。クリードさん」

「ミルクも美味しいわね。」

ソーニヤは大きくなったお腹をさすりながら満足そうだ。いつのまにか店の端の席にテキさんが座り、ミルクを飲んでいた。

1章・2（後書き）

ドゥーニャ「ソーニャ、あなた、今回、食べてだけじゃない。」

ソーニャ「怒ったり、悲しんだりでお腹が減ったのよ。それに、たくさん食べる女の人を可愛いと思う男性は多いって、なんかの記事で読んだわ。」

ドゥーニャ「それは、限度があると思うわ。まあ、あなたの本体が引っこ抜かれなくてよかったわ。」

ソーニャ「え？私の本体って、この髪の毛なの？」

ドゥーニャ「そうよ。あなたの本体はそのアホ毛よ。ちなみ私の額はある逆三角形の紋章よ。」

ソーニャ「ちよつと、なに？ドゥーニャ、あなた0章でそんな外見について触れられてないじゃない。」

ドゥーニャ「いいのよ。言ったもん勝ちなんだから。あきらも良いって言ってる、あきらの気が変わらないうちに今回の後書き終わるわよ。」

ソーニャ「ずるい。ドゥーニャ、私の設定も変えてったら」

1章 - 3

「ごちそうさま。クリードさん。」

本当に美味しかった。それに温かい。ミルクの最後の一滴まで飲み干した。ソーニャはウトウトしている。太って飛べなくなるソーニャの姿を想像する。それぞれで可愛いかもしれない。

「スクールの方から説明するように頼まれているけど、どこから話そうか。そうだね。まずは僕とこの店のことから。僕はイワンとスクールの研究科の仲間だったんだ。」

イワン兄さんはソーニャとドゥーニャのマスターだ。それにストの村の孤児院を出てスクールに入ったことは知っていた。ただ、それ以外のことはうまく思い出せない。何故かイワン兄さんのことは記憶が曖昧だった。それに研究科というのは初めて聞いた。クレアからは聞いていない。

「あゝ、研究科というのはスクールで魔法について研究をしているところなんだ。僕は見てのとおり体力はあんまりだからね。今はいろいろあって、このパブ、ラウンドストーンを営んでいるわけさ。イワンの友人ということ、きみの当面の面倒を見るようにスクールから頼まれたわけだ。それにこのパブは仕事の依頼とかも扱っているからね。夜は少し騒がしくなるけど、ここの3階の部屋を使ってもらって大丈夫だから。ちなみに、隣の部屋はアンが住んでいるからユーサイキア1安全だよ。それから、食事の方は僕の料理もついているからね。」

クリードが微笑む。ソーニャが喜びそうな話したが、ソーニャは夢の中で食事中のようだ。

「スクールにいる間は住む場所と食事は、保障されている。その分、スクールでの活動は命をかけることになるけど。きみにはソーニャが付いているから大丈夫かな・・・？」

眠っているソーニャを見ながらクリードが肩を竦める。

「なにになに？イワンがロリコンって話？わざわざソーニヤを付けているんだもんね」

アンが器を下げながら、横やりを入れる。ソーニヤが側にいるのが当たり前になっていたが、本来はイワン兄さんのところにいるのが普通なのだろう。

「でも、イワン達と一緒に過ごしてたら、ソーニヤが欲求不満でおかしくなっちゃうわね。」

言いたいことを言ってアンは接客に戻る。テキさんはいつの間にかいない。奥で食器を洗う音が聞こえる。

「えーと、話を戻すよ。スクールでは通常、最初の半年で基礎訓練をすることになっているんだけど、ナスターシャの場合は初めから魔法を使えるから別訓練になる。たぶん、他のスカウトされてきた人たちと一緒に訓練するはずだよ。ナスターシャのようにスカウトされてきた人間には魔法の使いかたは教えないんだよ。初めから使えるなら、それが本人にあった使いかただろうからね。それで、ある程度、戦える力があると認められるとランクづけされる。その後は、独自に魔法を習得するなり、実践に出るなり、各自の判断で行動してもらって大丈夫さ。まあ、各自でといっても、一人というわけにはいかないだろうから、このパブみたいな仕事を紹介する場所がいくつかあるんだよ。それについては訓練が終わったら、その時に説明するよ。ここまでは大丈夫かな？」

クリードは、優しい口調で説明してくれた。伝わったかどうか不安なのか、顔を覗き込んでくる。

「ふあゝ」

いつの間にか、隣に座っていたアンが大きく欠伸をした。

「眠くなる話だね。そんな話しはスクールに行ったら、そのうちわかるわよ。それより、部屋に案内してあげるわ。さあ、行きましよう。」

アンが手を引く。

「ちよっと、まだ、説明が。まあ、いいか。明日は朝からスクール

へ行くから早く休むといいよ。学長nのカウス老の所までは案内するから。だから明日はアンも朝から頼むよ。」

アンは軽く手を振ってクリードに返事をする。店の裏口へ回り、階段を上る。2階はクリードが使っているようだ。3階はアンと私がそして4階。というより屋根裏にはテキさん家族が住んでいるらしい。ただし、屋根裏へ立ち入ってはいけないというルールがあるようだ。あと、夜にはアンの部屋にも立ち入ってはいけない。アンは2度、強調してそう言っていた。ともかく、ユーサイキアについての一日目は早めに休むことにした。私に与えられた部屋はベッドとテーブルがあるだけで、今は他に何も無い。部屋は綺麗に掃除されていた。きつと、クリードが準備してくれたのだろう。精霊石をテーブルの上に置く。杖はベッドの近くの壁に立てかけた。ストの村から持ってきたのは、イワン兄さんが使っていた杖と、スクールから送られていた精霊石だけだった。シーツから陽の香りがする。新しい生活が始まった。まだ、何もない。それでも、クリードとアンは優しいそうだし、ソーニヤが付いてきてくれた。そういえば、ソーニヤは下に寝たままだ。気ままなソーニヤは好きなところで寝る方があっている。そう思った私は、疲れていたこともあって、そのまま眠ってしまった。

1章・3（後書き）

新しい生活に浮き足だっていたのだろうか。

私は後悔することになる。

なぜ、あの時、ソーニヤを置いて行ったのか。

これが、今生の別れになるとも知らずに。

ソーニヤ「ちょっと、ドゥーニヤ。変なナレーションつけないでよね。」

ドゥーニヤ「えつ。ダメ？」

ソーニヤ「これじゃ、私がいなくなっちゃうみたいじゃないの。」

ドゥーニヤ「大丈夫よ。あなたがなくなったら、私の出番が増えるから。」

ソーニヤ「大丈夫じゃないわよ。もう、油断できないわね。ヒロインの座は譲る気ないわよ。」

ドゥーニヤ「プツ。ヒロインですって。あなた、どう見ても道化じやない。食べて、寝て、太って。飛べない妖精は……って言われるのよ。」

ソーニヤ「キー、見てなさいよ。ここから私の魅力全開なんだから。」

ドゥーニヤ「どうかしら、この後書きのコーナーはネタばれなんだから、あなたの登場もここまですよ。」

ソーニヤ「そんなことないわよ。次も出るんだから。絶対、あなたには譲らないわ。」

1章 - 4

小鳥の鳴き声が聞こえる。勢いよく窓を開ける。朝日が気持ち良い。
「もう、朝なの？」

ソーニヤは眠そうな声だ。それにどことなく不機嫌そうな表情だ。

「おはようソーニヤ。今日はスクールに行く日だから、早く支度しなくちゃ。」

まだ、眠そうなソーニヤを連れて階段を下りる。

「おはよう。よく眠れたかい？」

1階に降りるとクリードが朝食の準備をしていた。

「おはようございます。クリードさん。ぐっすり眠れました。」

「それはよかった。ソーニヤの方は眠れなかったのかい？やっぱり、店の声が気になるかい？」

そういえば、店の方は夜までやっているのだった。昨夜は疲れていたからかまったく気付かなかった。

「違うわよ。下じゃなくて、隣よ。隣。上で寝なおそうしたら、

すごい音が聞こえるんだもん。」

「あはは、アンは寝ぞうが悪いからね。夜は気をつけないと。それとお酒を飲んだ時も注意した方がいいね。」

「酔うとひっかく？」

「いや。」

「かみつく？」

「いや。もつとすごい。」

「あれより……。命がいくらあっても足りないわね。」

ソーニヤが青ざめている。昨夜は何があったのだろうか。昨日はあんなに美味しそうに食べていた食事も、今朝は上の空だ。ときどき、何かを思い出しプルプル震えている。

「さて、そろそろ出掛けようか。僕も、カウス老に仕事の話があるからね。精霊石は忘れちゃだめだよ。」

「はい。」

「じゃ、テキさん。行ってくるから後のことは頼むよ。アンが起きるのは昼ぐらいだろうから。」

テキさんが任せると言わんばかりの顔で見送る。テキさんに軽く手を振りクリードの後を追う。今度はソーニヤもちゃんと付いてきている。

南門の大通りに出て街の中心へ向かう。中心に高い建物が見える。天にまで届きそうな高さだ。クリードの話では、その建物を中心に塀が円を描いているらしい。その塀の内側に入るのに精霊石が必要ということだった。ラウンドストーンを出てかなり歩いた。ソーニヤは空を見上げている。

「建物が見えたから、もつと近いかと思っていたわ。」

ソーニヤの意見に同意だった。ユーサイキアの街はかなり広い。「初めてきた時は僕も驚いたよ。他の街と比べるとかなり広いし、あんなに高い建物は見たことなかったからね。まあ、ずーっと、南に行くともつと大きな街もあるみたいだけどね。高さだけなら世界一さ」

クリードが自慢げに話して、上を見上げた。私も建物の先を見上げる。そのまま、後ろに倒れそうな高さだ。

「上まで、登れるんですか？」

「ん？登れるよ。何回か月の観測で登ったからね。二つの月に手が届きそうな感じだったよ。」

「本当ですか！登ってみたいな。ねえ、ソーニヤ。」

「私は嫌よ。あんな高いところまで登るなんて大変そうじゃない。」

「えー。」

私は肩を落とす。ソーニヤは通りの両側に並ぶお店の方に興味があるようだ。

「大丈夫だよ。中に魔力で上がる昇降機があるから簡単に行けるさ。最上階まで上がるとかなり魔力を使っちゃうけど。いつか、一緒に

行こうか？」

「やったー。クリードさん。約束ですよ。」

クリードの顔を見上げる。

「ああ。」

クリードが少し間を開けて横を向いて答えた。

「あら？クリード、なに赤面しちゃってるの？それに、二人だけで楽しむつもりのような。アンに報告しないといけないわ。」

ソーニヤが笑っている。なんか、とても楽しそうだ。

「やだな。ソーニヤ。その時は、ソーニヤもアンも一緒に行こうよ。あ、でも、上は寒いし、風も強いから気をつけないとダメだよ。」

「そうやって、邪魔者は来るなってことね。」

「まいったな。」

クリードは頭に手をやっている。ソーニヤの羽の動きがいつもより早い。今朝は元気がなかったのが嘘のようだ。やはり、ソーニヤは元気な方が可愛い。ソーニヤはスクールの入り口までクリードをからかい続けていた。

1章・4（後書き）

ソーニャ「ドゥーニャ。あの中央の高い建物だけど、どう思う？」

ドゥーニャ「きつと、いるわね。」

ソーニャ「そうよね。絶対いるわよね。」

ドゥーニャ「あれだけ高いんだもの。いるに違いないわ」

ソーニャ「やつぱ、最上階にいるんだわ。ラスボスが」

ドゥーニャ「途中に伝説の武器とかあるのよ。」

ソーニャ「それに、半分くらいのぼったたら因縁の相手とか出てくるのよね」

ドゥーニャ「でも、登るの大変そうね。」

ソーニャ「そうね。高いところはあまり好きじゃないわ。風が強いらしいし。」

ドゥーニャ「じゃあさ、倒しちゃえばいいんじゃない」

ソーニャ「そうね。そうすれば、ラスボスも一発ね。」

ドゥーニャ「一階部分の南側を壊しちゃえば、通りの上に倒れるから、損害も少なそうね。」

ソーニャ「これで、この小説も終りね。1章で無事完結だわ。」

ドゥーニャ「次週からは、ドゥーニャと愉快的仲間たちの冒険が始まるわよ」

ソーニャ「え？あなたが主役！？」

ドゥーニャ「言った者が勝ちですわよ。おほほほ」

1章 - 5

「さあ、あそこがカウス老の部屋だよ。」

「てつきり、あの高い建物の最上階にいるのかと思つたわ。」

案内された部屋は、スクールの入り口からまっすぐ伸びた建物の1階にあつた。見たところ他に並んでいる部屋と違いはなかった。強いて言えば、ドアに名前が書かれているくらいだ。それも、上から貼っただけで、後から付け足した感じだ。

「カウス老も歳だからね。あまり高いところは移動が大変だろ？」

ソーニヤは納得した顔で頷いている。クリードは微笑むとドアを2回ノックした。

「開いとるよ。」

部屋の中から低い穏やかな声が聞こえた。クリードがドアを開け、一礼して中に入った。

「失礼します。クリードです。ナスターシャを連れてまいりました。」

クリードの後に続いて部屋の中に入る。部屋の奥の机には本が山積みされていた。その本の横から白い髪と髭の老人が顔を出す。この人がカウス老なのだろう。スクールで一番偉い人と聞いていたが普通のおじいさんに見える。カウス老はクリードの顔を見て、少し間を置いて満面の笑顔になった。

「おー、クリード君。よくきてくれたね。そして、きみがナスターシャ君か。初めまして。クレア君から聞いた通りの可愛い子だ。あと、ソーニヤ君だね。以前、イワン君と一緒に会ったのかな。まあまた、座りなさい。」

カウス老は立ち上がり、出迎えてくれた。挨拶をしながら、私の顔とソーニヤを交互に見て微笑むと、手前の長椅子へ座らせてくれた。そしてお茶を淹れはじめたようだ。部屋の中は雑然としていた。とにかく物に溢れていた。古そうなものから新しいものまで部屋の両

側に並んでいる。ソーニヤも部屋の中に置いてある物が気になっているようだ。

「ここにある物って高いのかな。一つぐらいもらっても、わからないよね。」

ソーニヤが耳元で囁く。思わず苦笑する。

「なんじゃ、ソーニヤ君。わしの研究に興味があるのかね。クリード君の使い魔だけあるね。」

カウス老はお茶をテーブルに4つ置いた。とても嬉しそうな顔をしている。

「先生。ソーニヤはイワンの使い魔ですよ。」

クリードはそう言っていると、お茶を一口飲んだ。私もお茶に口にする。初めて飲む味だった。

「ん？そうじゃったな。クリード君に使い魔がいたら、さぞかし研究熱心な使い魔なんじゃろうな。」

カウス老は笑いながら髭を撫でる。それにしても、ソーニヤの性格はイワン兄さんから来ているのだろうか。やはり、イワン兄さんの事をはつきりと思い出せないでいた。

「先生。まずは、ナスターシャの精霊石を交換しないと。ナスターシャ。精霊石はあるかい？」

「おー、そうじゃな。フム。確かにこの辺に」

カウス老は透明な宝石をテーブルの上に置いた。手の爪ほどの大きさだ。私が持ってきた精霊石はクリードの前の方に置いた。

「最近、良い精霊石が手に入らなくてね。でも、運がよかった。小さいが純度は高い良物じゃ。では、ナスターシャ君。この精霊石を持って、魔法を使う要領で精霊石の中に魔力を注ぎこんでくれんか。」

私は頷き、渡された精霊石を両手で握り、手の中に意識を集中した。手を広げ、手の上の精霊石を見る。これと言った変化は何もなかった。

「ちょっと、貸してくれんかの。魔力は入っておるようじゃが、透

明なままじゃな。普通は色が変わったりするものじゃが。こっちの精霊石でも試してくれんかの。」

クリードの前に置いていた精霊石を受け取ると、同じように意識を集中する。その時、ピシツという音が聞こえた。手を開き、恐る恐る精霊石を確認する。縦に大きくヒビが入っていた。

「あゝ。」

覗き込んだソーニヤが低い声をあげる。

「ごめんなさい。」

私は悲鳴に近い声をあげ謝った。

「なゝに、謝る必要はない。元々、純度が低い精霊石を渡しておるからの。しかし、割れおったか。」

カウス老は受け取るいろんな方向から精霊石を観察している。

「大丈夫だよ。ナスターシャ。先生は良い実験材料が手に入って嬉しそうだから。」

クリードはカウス老の様子を見て笑顔で言った。確かにカウス老の顔は嬉々としている。クリードは小さい方の精霊石を入れ物に入れると渡してくれた。

「これは無くしたらダメだからね。先生。話の続きをお願いします。」

「おっと、すまん。すまん。」

カウス老は割れた精霊石を大事そうにしまつとスクールについて語り始めた。スクールについての説明が終わっても話は続いた。お茶はある地方の一級品だとか、自分の研究だとか。途中から知らない言葉がたくさん出てきて、内容はわからなかった。そもそも、物心ついた時からストの村の外を出た記憶が無い。村での事しか知らなかった。ユーサイキアについてからは驚かされる事ばかりだ。クリードは熱心に話を聞いている。ソーニヤは眠そうな顔だ。私はもらった精霊石に目をやった。その透明な精霊石は見えていると吸い込まれてしまいそうだった。

1章・5（後書き）

ソーニャ「ドゥーニャ。大変よ。作者が小説を書く暇が無いとほざいているらしいわ。今回の小説も適当に書いて、読み返すこともできなかつたらしいわ。」

ドゥーニャ「なによ。いくら師走とはいえ、書く暇がないわけじゃない。そんな事言っている暇があったら手を動かせばいいのよ。」

ソーニャ「本当よね。食事をする暇だって、寝る暇だってあるんだもんね。」

ドゥーニャ「息をする暇があるうちは、言い訳は許さない。私の再登場までは死んでも書かせてみせるわ。」

起き上り背伸びをする。今日は身体が軽い。ちゃんとした所で寝るのは久しぶりだ。ユーサイキアに自分の部屋に帰って来たのは昨日の陽が落ちてからだった。私はナスターシャをスクールに推薦した後、ベルゼブブについて調査を続けていた。あの時に見た神官の姿をしたゴ布林。あいつが死ぬ時に使ったドクロ。ベルゼブブに繋がる情報が欲しかった。何でもいいから手掛かりが求め、ここのゴ布林達の住みかを探ったがゴ布林の姿はなかった。この辺りにいたゴ布林は全てあの戦いに動員されていたのだろうか。しかし、あそこまで統率された動きの軍だったのだ。長い期間をかけて準備をしたに違いない。そんな事がゴ布林に可能なのだろうか。疑問ばかりが浮かぶ。神官姿のゴ布林から聞き出せればよかったのだが、あのゴ布林はドゥーニヤが首を刎ねてしまった。戦場に戻っても、あのドクロどころか、ゴ布林の肉片すら残っていないかった。あるのは私の魔法の跡が大地に刻まれているだけだった。残る手掛かりはソーニヤとドゥーニヤしかない。あの2体は何か知っているはずだ。しかし、ソーニヤとドゥーニヤが簡単に教えるとは思わなかった。それに、私は彼女らのことを好きになれなかった。ゴ布林を惨殺していくドゥーニヤの姿は思い出すだけでも、背筋が冷たくなる。救いなのは、ソーニヤが数日前からナスターシャと一緒にユーサイキアに来ていることだ。聞き出す機会はあるはずだ。ナスターシャの様子を見に行くついでに探りを入れる。

私は着替えると、ナスターシャがここユーサイキアで世話になっているラウンドストーンへ向かった。ラウンドストーンへは、食事以外にも仕事の依頼があるか確認に行く。スクールへの公式の依頼でないものもある。独りで行動する私には、公式の依頼を受けられることは少ない。ラウンドストーンで非公式の仕事を取る方が多かった。

ラウンドストーンに着くと軽い食事を取った。ここのマスターは、小柄で華奢な男だ。声が小さく頼りない。必要以上のことは話さない。独特の存在感だ。だが、この余計なことを話さない男が営むラウンドストーンの雰囲気は好きだった。なにより、料理は美味しい。「あら？クレアちゃん。久しぶり。」
「お久しぶりです。アンさん。何か報酬の良い仕事はありませんか？」

仕事の依頼の確認は、口数の少ないマスターではなく。ここの自称看板娘のアンさんに聞くことが多かった。もつとも、看板娘を目当てに来る客はいない。

「そうね。ないわ。」

アンはきっぱりと答えた後に、頬に手を当てて、首をかしげた。

「この前のゴブリン達のおかげ、長期の防衛契約は増えているんだけど、そんなのスクールの方で希望者を募っちゃっているし、クレアちゃんは、そんなの望んでいないでしょう。そうだ。あのマスターを殺してくれたら私から報酬だすわよ。」

アンは笑いながら、マスターの方を見る。冗談に聞こえるが目が笑っていない。私もマスターの方を見る。マスターと目が合った。今の会話は聞こえていたようだ。マスターはあまり表情には出さないが怒っているのがわかる。しかし、あの弱そうなマスターを殺すだけで金が手に入る。少し心が揺さぶられる。ベルゼブブ調査のため旅に出ていたので、手持ちの金がなかった。それになんの結果も得られなかったのだ。この簡単そうな仕事に飛びつきたくなる。

「アンさん。また、喧嘩したんですか？」

一瞬でも真剣に考えてしまった自分の感情を誤魔化すように質問をした。聞いてしまった後、すぐに後悔した。

「クレアちゃん。聞いてくれる？」。私がこの前、ちよつと寝坊したら・・・」

こんなところで、時間を使いたくなかった。しかし、アンの話しを途中で止めるのは無理そうだ。そんな私の気持ちに追い打ちをか

けるようにアンの話し方に感情がこもっていく。

1章・6（後書き）

クリードを殺しますか？

> はい

> いいえ

ドゥーニャ「はい。」

ソーニャ「いいえ。」

ドゥーニャ「あれ？答えが違ったわね。」

ソーニャ「クリードがいないと食事に困るわ。絶対、アンは料理音痴だもの。」

ドゥーニャ「そうね。あなたにとっては切実な問題ね。私はクリードと戦ってみたいわ。」

ソーニャ「あなた、本編で出番がないからって、ここで戦うのはやめてよね。」

ドゥーニャ「いいじゃない。たぶん、ここで殺しても本編では生きているわよ。」

ソーニャ「え、そういう問題なの。じゃあ、いいかな。でも、ドゥーニャが負けたら、ここにも登場しなくなるわよ。」

ドゥーニャ「えっ？私たちって負ける要素あるの？」

ソーニャ「うん。クリードは私たちの生い立ちを少しなりとも知っているみたいだし、予想外の展開もありえるかもよ。」

ドゥーニャ「・・・。平和が一番よね。」

ソーニャ「そうよね。」

1章 - 7

中央の通りを北へ進んだ。

アンの話によるとナスタシーヤは6組で訓練を受けているはずだ。予想した通りだった。ここスクールでは訓練の内容により組みを分けている。1組は一定以上の実力がある者達だ。それは魔法が使える、使えないに関係ない。私が知る限り1組に入るのは、王族か貴族だ。既に高い教育を受けている場合が多い。2組は貴族で魔法の素質がある者。3組は貴族で魔法の素質が無い者。4組は平民で魔法の素質がある者。5組は平民で魔法の素質が無い者だ。1組は実践訓練から、2・4組は魔法の基礎から訓練、3・5組は魔法対策から訓練が始まる。そして、ナスタシーヤがいる6組に入るのは、奴隷や孤児が中心だ。ただ、異質な才能をもっている場合は貴族や平民でも入れられる。そして、それぞれに合った訓練が行われる。中には、初めから思わぬ実力を発揮する者もいる。もっとも、ここ数年は6組に入れられる人間は少ない。全体としてはスクールに入る人数は増えている。スクールが活躍の場が増えてからは魔法の素質がなくとも入って来る者が多い。貴族はもちろんのこと、平民でもスクールに所属したことが一種のステータスになっているのだ。それでも、6組に入ってくる者は減っていた。

スクールの敷地内に入っていた。入口から中央の建物へ向かう。左側で訓練をしている集団がいた。視界の端で確認し、そのまま歩を進める。スクールの敷地の北西に向かった。そこにはやや高い壁に囲まれた区画がある。まだ、そこで訓練をしている時期のはずだ。2年前の私もそうだった。

扉を開ける。陽が直接入らないため薄暗い。外側は石畳で囲まれている。その上から出ないような気をつけ、部屋の中央を視線を向ける。円形の魔法陣。中央に女が座している。6組の訓練を受け持つパトリシアだ。影の女王パトリシア。一流の呪術師でありながら、数々

の武芸を極めている。厳しすぎる訓練から貴族はおるか平民の訓練からも外されたほどだ。

「クレア？何してんの？」

不意に横から声が聞こえた。特徴のある声。ソーニヤだ。声のした右上を見る。石柱の上で寝ている。

「あなたを探していたのよ。聞きたいことがあるの。」

「私に？ナスターシャじゃなくて？まあ、良いわよ。ナスターシャが訓練中なんだけど、暇で、暇で。ほら、あそこに倒れてる。」

ソーニヤが手で示した方向を見ると、仰向けに倒れたナスターシャがいた。他に二人倒れているのが見える。私たちの時と変わっていない。パトリシアの訓練内容は簡単だ。パトリシアを倒せばいい。

パトリシアは中央で座して動かない。しかし、この訓練場一帯が彼女の魔法射程範囲内だ。

「ずっと、やられっぱなし何だもの。見ても面白くないし、中に入ったら私までやられちゃうでしょ。」

ソーニヤは頬を膨らましている。

「あなたに、聞きたいのはベルゼブブのことよ。」

ソーニヤの表情が変わる。ナスターシャの方を見つめる。

「ソーニヤ。あなた。あの日、ゴ布林達が来ることを知っていたわね？」

沈黙。ソーニヤはナスターシャの方を見つめたままだ。

「それに、ゴ布林達がベルゼブブを復活させる気だったことも。」

ソーニヤはゆっくりと目を閉じた。沈黙。

「あなた、それを知っていてナスターシャを村から連れ出した。そして私に会わせた。私がベルゼブブと戦うことまで計算して。そうでしょ？」

私は自分の声が大きくなっていることに驚いた。いつも平静を保つようにしていたのだが。やはり、ソーニヤからの返事はない。視線をソーニヤから外す。私は次の言葉を発しようとしたが、その前に心を落ちつけた。

「すぴー、すぴー。」

ソーニヤの方を振り向く。ソーニヤの頭が上下している。私は体中の血液が沸騰する音を聞いた。怒りが頂点に達した後、頭の温度が急激に冷めていく。叩き潰す。手を握りしめた。ソーニヤがピクリと動く。私は深呼吸をした。ソーニヤのペースに乗せられるところだった。

「ソーニヤ。下手な寝た振りは止めなさい。」

「ぐー。」

気付いた時にはソーニヤを叩いていた。短い悲鳴。すっきりした。

「クレア。酷い。それが人にものを尋ねる態度なの？」

ソーニヤは大げさに痛がっているが無傷だった。無言で睨む。

「はー。わかったわよ。最初に言っておくけど、私はあなたが知りたがっているようなことは何も教えられないわよ。」

予想はしていた。そう簡単に教えるようなら苦労はしない。

「まず、ベルゼブブのことだけど、何も知らないわ。だって、私、産まれてから2年くらいしか経っていないもの。」

「でも、あの日、ゴ布林達が来ることは知っていたのよね？」

ソーニヤが視線を逸らす。沈黙。それが答えなのだろう。

「じゃ、ゴ布林が持っていた髑髏はどうした？ ナスターシャが打ち抜いた残骸があったはずよ。あそこには何も残っていなかった。」

ソーニヤがこちらに視線を向けた。沈黙。ソーニヤは視線を逸らさない。訓練場の方から音がした。ソーニヤがそちらを向く。ナスターシャが立ち上がるうとしている。杖はパトリシアに奪われているようだ。杖があったとしても攻撃に移れるかどうか。立つのがやっとなだろう。ソーニヤとの話しが中断してしまったが、ナスターシャが気になった。ソーニヤもそうだろう。ナスターシャは立っている。顔は傷だらけ。服はボロボロ。最初に会った時の事を思い出した。あの時もあんな感じだった。男の子かと思ったくらいだ。ナスターシャの足が震えている。もう限界だ。それでも、パトリシアの魔法が来るはずだ。息をのむ。ナスターシャが一步下がる。間を置かず

ナスターシャが立っていた所に黒い手が下から突き上げる。

「避けた。」

ソーニヤは身を乗り出して喜んでいる。私がソーニヤの方に気を取られた刹那、黒い手はナスターシャの身体を払っていた。ナスターシャの身体は吹っ飛んだ。思わずナスターシャの方へ駆け寄りそうになる。

「あゝ、今日はもうダメみたいね。」

「ソーニヤ、さっきの話の続きだけど」

「ちよつと、待って。面白いものが見れるわよ。」

ナスターシャが立っていたところに赤髪の男子がいた。パトリシアが放った黒い手を掴んでいる。奇声。食いちぎる。

「何？あの子。魔法を食べているの。」

「面白い子よね。初めて見た時はびっくりしたわ。お？もう一人も気がついたみたい。」

女の子だ。酷く痩せている。パトリシアの方を睨んでいる。口が動いているのが分かる。何を言っているのかは聞き取れない。よろよろしながら、パトリシアに近づいている。何かに憑かれたような動き。2歩、3歩と進んだところで黒い手に捕まり崩れ落ちた。奇声。赤髪の男子が跳躍していた。パトリシアに届いた。パトリシアが身体をいなす。男の子は壁に叩きつけられ、気を失ったようだ。

「ね？面白い子たちでしょ。今日の訓練は終わりみたいね。まあ、暫くは起きないでしょうけど。」

パトリシアは立ち上がり赤髪の男子と痩せた女子を担ぎあげた。こちらへ歩いてくる。

「クレア。生きていたのね。あなたは死に魅せられていると思ったのにね。」

「ええ。先生に鍛えられたお陰で。」

パトリシアは笑みを浮かべる。笑うと20代に見える。

「どう、久しぶりに立ち合ってみる？」

「遠慮しておきます。先生とここで戦うほど、命知らずじゃありま

せんから。」

2年前の仕返しをしたいところだが、影の女王相手に影に囲まれたここで戦うのは自殺行為だ。

「残念ね。じゃ、私はこの子たちを連れて帰るから、あの子はお願いね。」

杖を渡された。ナスターシャが使っていたものだ。パトリシアは軽く手を振って去って行った。

「それにしても、今日も酷くやられたもんね。今日はクレアがいるから楽で良いわ。」

ソーニヤはナスターシャの身体を突っついていて。どうやら私が送っていくことが決定しているようだ。私はナスターシャの身体を抱えた。軽い。顔を覗き込む。傷だらけだ。呼吸はしている。

「ほら。早く。ラウンドストーンまで行くわよ。ご飯。ご飯。」

ソーニヤは先に飛んでいく。私はナスターシャを抱え、後を追う。外は陽が落ちかけている。ぐったりとしているナスターシャの顔を見ると心配になってくる。やはり、パトリシアの訓練は厳しい。それでも、今なら必要な訓練だと思える。ここで耐えられなくて死ぬならそれも運命なのだろう。少なくとも、生きたまま魔物に食べられたり、死ぬことも許されず玩ばれたりした連中よりはまともな死にかたができる。

「そうだ。クレア。」

スクールの出口でソーニヤが振り向いた。

「ベルゼブブのことを知りたいなら慌てなくていいわ。あなたはもう逃げられないのだから。」

ソーニヤは、私の顔をしばらく見ると口元に笑みを浮かべそのまま人混みへ消えて行った。その笑みの真意はわからないがはっきりしたことがある。私はソーニヤが大嫌いだ。

1章・7（後書き）

ソーニヤ「あなたはもう逃げられないのだから。あなたはもう逃げられないのだから。」

ドゥーニヤ「ソーニヤ。さっきから何しているの？」

ソーニヤ「ドゥーニヤ。ドゥーニヤ。このセリフカッコ良くない？
あなたはもう逃げられないのだから。」

ドゥーニヤ「あなた、からかうのは良いのだけど、不適當なセリフが多すぎるわよ。それじゃ、読者様が混乱するわ。」

ソーニヤ「えゝ、だって。カッコいいでしょ。あなたはもう逃げられないのだから。」

ドゥーニヤ「あごに手を当てたってダメなもんはダメよ。目を見開いたって駄目。」

ソーニヤ「もう、ドゥーニヤったら嫉妬しちゃってゝ。あなたの出番は本編には無いのだから。」

ドゥーニヤ「あゝ、駄目だわ。生きたまま玩ばれる妖精さんができそうだわ。」

ソーニヤ「ちよつと、まつ、足が動かなくなつ・・・」

ドゥーニヤ「黙っていると可愛いわよ。ソーニヤ。次は肘から下を落とすから、あら？氣絶しちゃったのかしら。次話の更新までには直すから大丈夫よ。だからもうちよつとだけ。ね。」

1章 - 8

ユーサイキアに戻った後、ジェラルルはヤハチの街へ出かけて行った。街の近くにオークが集団で出没しているという話だった。中にはオーガも混ざっているらしく、ジェラルルが所属する騎士団が出勤することになった。

「ジェラルルのことが心配ですか、お嬢様。」

「別に心配なんかしてないわ。」

「そうですか、何か落ちつかない様子でしたので。」

セバスチャンはにっこり笑う。ジェラルルの心配をすることはなかった。騎士団の中でも1、2を争う剣の腕前だ。攻撃魔法も使う。愛用しているルーンソードは魔力を高める術式が刻み込まれている。オーガの1匹、2匹に遅れを取る様な事はない。そう、心配はしていなかった。

「もう、ジェラルルまで私を子供扱いして。」

ジェラルルにしつこく注意されたことを思い出した。いつまでも、心配し過ぎだ。ここには居ないジェラルルへ不満をぶつける。この不満の元は、数日前に家に帰ってからだ。父も母も子供扱いばかり。貴族の娘だから、いざと言う時に民を守れないといけない。そう思っ、て、スクールに入ったのに。

「ダメね。」

ため息をつく。同じことばかり考えて抜け出せずにいる。

「セバスチャン。出かけてくるわ。」

「お嬢様。どちらへ。」

「教会かしら。」

どこに行くか考えて無かった。そういう時は自然と教会に行ってしまう。

「そうですか。お氣をつけて。」

ユーサイキアの街は明るい。ジェラルルがヤハチの街へ出勤したの

が嘘のようだ。自然と足が人の多い方へ向かった。市場だ。ジェラルがいると見て回れない場所だった。人混みの中で頭より高い位置にソーニヤが飛んでいるのが見える。近寄る。ソーニヤの下にナスターシャがいた。

「こんにちは。ナスターシャ。」

「こんにちは。えくと、フィリアさん！」

ナスターシャは以前会った時と同じ笑顔を向けている。しかし、顔は傷だらけだった。

「偶然ね。何をしているのかしら？」

偶然。いや、無意識のうちに探していたのだと思った。私が助けた少女と騒がしい妖精がラウンドストーンにいますという噂話はセバスチャンから聞いていたのだ。騒がしい妖精ことソーニヤが目立つので噂は広がっている。もっとも、助けたというのは誤解だった。

「今から、精霊石をアクセサリーにしてもらうところなんです、M & Gというお店がどこにあるのかわからなくて？」

ナスターシャは顔を赤らめてうつむいた。

「それなら、あそこにあるお店よ。」

ナスターシャは看板をじーっと見ている。文字を読むのに慣れていないようだ。それに、この店の看板は読み難い字体だ。

「あ、本当だ。ありがとうございます。」

「どういたしまして。ナスターシャはどのようなアクセサリーにするの？」

「指輪にしてもらうつもりです。その、指輪が似合っている人がいたので。フィリアさんはどんなアクセサリーなんですか？」

「私のは、これよ。」

胸にかけてあるロザリオをナスターシャの前に出した。ロザリオの一番大きな石がスクールの精霊石だ。ナスターシャが覗き込む。ますます強い瞳だ。

「ナスターシャ。あなた、どうして、スクールに入っただの？そんなに傷だらけになってまで。」

ナスターシャが首を傾げる。

「どうしてだろう？ 守られてばかりはいやだから、かな？」

「守られてばかりって・・・どうしたの？」

ナスターシャの目から涙が溢れていた。

「あれ？ なんて。わたし。」

「そんな拭き方したら。ほら。傷も開いちゃう。」

私はハンカチを取り出して、涙を拭う。そして、ナスターシャの頬に手を当て、治癒の魔法を唱える。

「落ちついたかしら。女の子なんだから、顔に傷を残しちゃだめよ。」

「ありがとうございます。治癒の魔法、すごいですね。」

ナスターシャが笑顔を作る。どこかきこえない。健気さに心が苦しくなる。

「あなたの身体が持っている治癒の力を高めただけ。あまり無理しちゃだめよ。」

ナスターシャが少し困ったような顔をする。ソーニヤが静かにナスターシャの頭の上に降りてきた。どこか頭のくせ毛に勢いが無い。

「こんにちは。ソーニヤ。なんか、元気ないわね。」

「それが、朝から家の人に怒られたみたいで。」

ナスターシャは頭の上のソーニヤを気にしながら笑った。今度は表情が柔らかい。

「あなた達、本当の姉妹みたいね。」

「困った妹がいて大変です。」

「なに言ってるのよ。私が姉にきまつてるじゃない。」

ソーニヤはナスターシャの頭の上で暴れている。二人とも楽しそうだ。私も笑顔になる。二人がキョトンとした表情でこちらを見た。

二人も笑顔になる。

「それじゃ、私はもう行くわ。じゃあ、またね。」

「フィリアさん。ありがとうございます。」

ナスターシャが元気よく手を振る。ソーニヤも頭の上で手を振る。

似ていないけど、似ている二人。彼女達を見ながら思った。教会へ
行こう。そして、ジェラル드가無事に帰って来ることを祈ろうと。

1章・8（後書き）

ドゥーニャ「え」と、水20リットル、炭素20kg、アンモニア4リットル、石灰1.5kg、リン800g……。間違った。ソーニャを再生するんだった。なんか面倒になってきたわ。このままの方が静かで良いかしら。いや、ダメよね。まずは、本体のアホ毛を引っ抜いて、鉢植えに挿して、水をかけて、陽のあたるところへ……。なんか元気ないわね。そうか、肥料が必要だわ。ソーニャの身体を細かく切り刻んで、よく混ぜてつと。無機化合物になるまで、よく、発酵させないと。うゝん面倒だわ。適当に一緒に埋めといたら大丈夫よね。羽も忘れずに埋めてつと。早く大きくなるのよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2345x/>

たゆたう魂のうた

2012年1月14日16時54分発行